

シヴィリティをめぐる東西の対話：礼節、市民性、公共圏

施, 光恒
九州大学大学院比較社会文化研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/26464>

出版情報：政治研究. 59, pp.43-46, 2012-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

シンポジウムの記録

シヴィリテイをめぐる東西の対話——礼節、市民性、公共圏——

施 光恒

【主催】九州大学大学院比較社会文化研究院・施 光恒 研究室（科学研究費「日本文化に根差した『共生』理念に関する政治理論的研究」(二〇一一年度～二〇一三年度、基盤研究C、研究代表者・施 光恒)

【共催】九州大学政治研究会

【日時】二〇一一年二月十五日（木）於・九州大学法学部 大会議室

【プログラム】

ご挨拶 施 光恒（九州大学大学院比較社会文化研究院准教

授）「シンポジウムの企画意図」

●第一部 日本と西洋におけるシヴィリテイ

報告1 木村俊道氏（九州大学大学院法学研究院教授）「西洋

におけるシヴィリテイの観念」

コメント 野々村淑子氏（九州大学大学院人間環境学研究院

准教授）

報告2 池上英子氏（米国ニュースクール大学大学院社会学部教授）「日本におけるシヴィリテイの実践」

コメント 中野三敏氏（九州大学文学部名誉教授、文化功勞者）

質疑応答

●第二部 パネル・ディスカッション「シヴィリテイをめぐる東西の対話——礼節、市民性、公共圏——」

パネリスト 中野三敏氏、池上英子氏、野々村淑子氏、木村俊道氏

司会 施 光恒

【参加者】

秋本彩織、伊賀泰佑、池上英子、鎌田厚志、木村俊道、小林悠太、施光恒、田中良太、中野三敏、野々村淑子、蓮見二郎、福井崇郎、細見佳子、森敦嗣、山内優希、山中亜紀

（以上一六名）

科学研究費「日本文化に根差した『共生』理念に関する政治理論的研究」の研究活動の一環として、シンポジウム「シヴィリテイをめぐる東西の対話——礼節、市民性、公共圏

——」を開催した。

本シンポジウムを企画した理由は次のようなものである。

一つは、現代の自由民主主義を成り立たせている社会的統合のありかたについてあらためて検討する必要があるからである。当然であるが、自由民主主義社会では、異なる見解、世界観、イデオロギーを有する人々のあいだでの共生が求められる。つまり多様性の許容が求められる。しかし同時に、社会的統合も強く要求される。現代の議論において社会的統合をもたらしものとしてしばしばもちだされるのは、なんらかの原理（たとえば一国における憲法原理など）に対する忠誠という明示的かつ合理的なものである。しかし単なる原理に対する忠誠だけでは、現実の社会的統合は説明できない場合が多々ある。また原理への忠誠という統合では、かえって見解や思想の自由を削減してしまわないかという疑問もある。そのため社会的統合の暗黙的かつ反合理主義的要素にあらためて着目してみたいと考えた。いわゆるシヴィリティ（礼節、市民性）と称されてきた作法や礼儀、心の習慣などの次元である。逆説的に感じられるかもしれないが、こうした次元による結びつきのほうが、明示的な原理による統合よりも、見解や思想の多様性を許容する統合の絆をもたらし側面があるのではないか。

第二に、東日本大震災の直後の経験があげられる。震災の直後、海外の非常に多くのマスコミが異口同音に称賛したのは、震災の混乱のなかでも、被災地では大規模な略奪や暴動がまったくみられず、秩序や規律がほぼ整然と守られていたことである。日本の社会において秩序を形成している主たるものは、法や権力ではなく、むしろ人々のあいだにある慣習、規律意識、秩序感覚といったものではないか。この点からも、社会的統合の暗黙的かつ反合理主義的要素への注目が求められるように思われる。

第三に、市民性をめぐる現在の議論における文化的偏りの是正の必要を感じるからである。これまで多くの論者が、日本人は非自律的であり、市民性や主体性が欠けているという趣旨の指摘を行ってきた。しかし前述の震災直後の経験をかみみて、日本社会には市民性が欠如しているという指摘は少なくとも一面的だといえよう。より説明力のある市民性の観念の探求のため、日欧比較の必要性を感じた。

以上のような理由から、本シンポジウムでは、英国の政治思想史の専門家である木村俊道氏、ならびに日本の江戸期を主なフィールドとする歴史社会学者である池上英子氏に報告をお願いした。

木村氏は、ご著作『文明の作法——初期イングランドにお

ける政治と社交——』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）に基づき、初期近代の英国におけるシヴィリテイの観念の発展や変容について報告された。シヴィリテイの起源は宮廷文化に求められること、当時の作法書 (courtesy books) からシヴィリテイの内容や社会的意義がうかがい知れることなどへの言及がなされた。またシヴィリテイの獲得のための大陸旅行の習慣やシヴィリテイの政治的顕れの場としての外交についても論じられた。またデモクラシーとナショナリズムが登場する近代にいたってシヴィリテイの政治的衰退がみられることの指摘もなされた。

池上氏は、ご著作『美と礼節の絆——日本における交際文化の政治的起源——』（NIT出版、二〇〇五年）に基づき、日本におけるシヴィリテイの実践について報告なさった。倫理や政治とのかかわりでシヴィリテイの観念が発展してきた欧米と異なり、日本では、俳諧や華道、茶道などの芸道のサークルを媒介としてシヴィリテイの実践が江戸期に花開いたという議論がなされた。また明治期の日本の近代化への含意も言及された。

木村報告に対しては英国などの教育文化史を専門とする野々村淑子氏が、また池上報告に対しては江戸期の文学や庶民文化の権威である中野三敏氏が、それぞれコメントター

を務めた。フロアからの質疑も多く提示され、活発な議論が展開された。

本シンポジウムでは、多岐にわたる論点が提示されたため、議論の内容をまとめるのは少々難しい。私なりの考察として、全般に関わる三つの点のみ提示したい。

一つは、やはり昨今の社会的統合のあり方をめぐる議論は、現代の欧米の一般的な「知」のとらえ方に影響されているためか、少々、明示的な次の次元への偏りが見られないかという点である。慣習や作法、型といった暗黙的次元への注目が、実際の社会的統合のあり方を説明するためにも、また望ましいシヴィリテイや社会的統合の形態を模索するためにも、求められるのではないか。

二点目は、社会的統合のありかたやシヴィリテイの観念などのような問題を考えるためには、学際的探究がつねに必要なではないかということである。たとえば木村氏の分析の対象とした作法書や、池上氏の対象とする美的サークルの活動記録や芸道の教則本は、通常、政治学の研究対象にはなっていない。現代の常識的観念にとられず、各時代や各文化に即した柔軟な研究方法がとられる必要がある。

三点目は、さまざまな文化や時代に目を配ることがやはり大切であろうということである。池上氏の描き出す日本のシ

ヴィリティの実践の形態やその発展の経緯は、欧米の政治理論や社会理論で一般的に論じられてきたこととかなり違う。また木村氏の着目する初期近代の「文明の作法」を軸とする政治のありかたは、現代のそれとは大きく異なる。ひとつの文化的見方、時代の見方にとらわれることのない探究の大切さを実感した。